〈研究ノート〉

『菊と刀』誕生の背景

福井七子

はじめに

ルース・ベネディクト研究を新たなる前進に導いた研究書、"Ruth Benedict; Stranger in this land"がマーガレット・カフリーによって書かれたのは一九八九年であった。[1] カフリーは現在メンフィス州立大学で女性史を教えているが、歴史家の立場から資料を丹念に調べ、十年もの歳月をかけて書いた本書は、ベネディクトの生い立ちや環境、そして教育などがベネディクトの人格形成にいかなる影響を及ぼしたのか、とくにそれがマーガレット・ミードとの関係においてうまく説明されている。カフリーはこの本の中で自らの紹介を一切行っていないが、それは、彼女の考え方や生き方が本書を通して貫かれているため敢えてそれをする必要を感じなかったのであろう。

一九九二年にこの本を『さまよえる人　ルース・ベネディクト』として関西大学出版部から翻訳出版する機会を得た。しかし、本書における『菊と刀』の部分はわずか数ページであったことから、ニューヨーク郊外のヴァッサー大学にあるベネディクト・コレクションの資料を三度に亘って調査を行った。

この論文を書くきっかけとなったのは、昨年二度目の調査をした時に一通の手紙を目にしたからであった。それは、ベネディクトの『菊と刀』が出版される直前の一九四六年一〇月二一日に、ベネディクトがジェフリー・ゴアラーに宛てて送ったものである。[2]

この手紙から、『菊と刀』のタイトルは、果たしてベネディクト自身が望んでいたものだったのだろうかと疑問を感じた。日本ではタイトルのもつその神秘性によって、ベネディクトが心に描いていた「菊」と「刀」とは異なった解釈がされているのではないか。もしそうであるなら、ベネディクトが「菊」と「刀」に持ったイメージはどのようなものであったのか。『菊と刀』の出版の経緯を調べることで、そうした疑問解決の手掛か

りが得られ、さらにベネディクトの新たなる一面が見えるのではないか、また出版をめぐってその背景にある関連資料も明らかになってくるのではないかと考えた。この論文を作成するために用いた資料は、従って、ベネディクトの戦時中の研究が基本になっており、そのほとんどは日本で紹介されておらず、もちろん日本語訳もでていないものがほとんどである。一九九八年に没後五十年を迎えるベネディクトは、『菊と刀』の強烈なイメージによるためか、またその早すぎた死のためか、ベネディクトに関連する資料はまだ手つかずの状態であると言っても過言ではない。ここで紹介する資料はほんの一部ではあるが、これからの研究の一助になることを願うものである。

I

来月の半ば頃に本が出版されますから、二〜三週間のうちにお送りさせていただきます。その本のタイトル、『菊と刀　日本文化の型』にまつわる話はお聞きになりましたか。マーガレットは、私が出版社に振り回されていると言っているのですよ。全くその通りです。お気に召せば幸いですが、保証の限りではありません。

ここで書かれているマーガレットとは、マーガレット・ミードのことである。『菊と刀』出版の発端は、一九四五年一〇月二二日にベネディクトが出版社ホートン・ミフリンへ出した手紙に始まる。ベネディクトが出版社に持ち掛けた本は、彼女がOffice of War Information (OWI)「戦時情報局」で働いていたときに調査したものをまとめた "Japanese Behavior Patterns"[3] を基礎にしたものであることは拙論[4]でも書き、またポーリン・ケントも述べている[5]。"Japanese Behavior Patterns" は五九ページの報告書で、一九四五年九月一五日の日付と、リポートNo.25が記されている。しかし、このリポートの「前書き」に書かれているが、この研究は謄写版印刷の形式で出来上がっており、日本の降伏以前にすでに配布されていた。それを再び文書として作成したのであった。

ベネディクトは、このリポートを書くにあたっての自らの姿勢を明確に示している。また、『菊と刀』では非常に多くのページを費やして書いている「子供は学ぶ」に関わることが、"Japanese Behavior Patterns" では敢えて触れていない理由も説明している。

この研究で用いた方法は文化人類学の用法である。それは、どこの人類であっても基本的には類似した潜在能力を有するものと見なすが、人類の優れた功績はその適応性にあることに力点を置くものである。人類は非常に幼い頃から、自分が生活しているもとでの社会制度や、自分の周囲の人々に関わりを持つように仕向けられてきた、様々な力に反応することで生き方を学んできた。こうした様々な力における相違が、種族や国家あるいは世界の大きな地域などにおいて、自分たち、世界、および仲間との関係に対する

独特の国家観や地域観を生み出すことになる。そしてそれぞれの国における人々は、こうした評価と関連ある様々なやり方で行動するのである。（中略）この文化の伝承者になるために、日本の子供たちがどのように育てられるかという基本的な問題には、ここでは触れていない。その主題については、ジェフリー・ゴアラーが彼の著名な研究の中ですでに論じているからである。[6] そうした発展的な研究は、いかなる文化においても行動パターンを判断する上での基礎となるものである。しかしそれを行うためには、各世代の人々がそれぞれ身につけるようになる行動パターンに関する説明をつけなければならない。

（"Japanese Behavior Patterns"）[7]

ベネディクトが戦時情報局に関わったのは、正式には一九四三年六月二八日であった。彼女は文化分析部のリサーチ及び分析局における基礎分析課の課長に年俸四六〇〇ドルで任命された。[8] 当初ベネディクトは主としてヨーロッパ研究に携わっていた。ベネディクトにとって戦時情報局での任務は喜びだったようである。友人に送った手紙には彼女のそこでの仕事に対する期待が感じられる。[9] 一九四四年六月から日本研究をすることになり、文化分析部から外国心理分析部に移ることを命じられたのは一九四五年一月一日であった。[10]

ベネディクトは帰米や在米の日本人をインタビューしたり、日本の小説やフィルムなどから日本人の性格分析を行った。ベネディクトが参考にしたと思われれる日本関係の文献については、ポーリン・ケントの研究論文に詳しく書かれている。[11] ベネディクトによる著作や覚書きのなかで引用文献としては述べられていないが、ベネディクトは大仏次郎の小説、『霧笛』に興味を持ったようで、「これはオイディプス・ファンタジーを書いたすばらしい作品である」と、友人の心理学者にも送っているほどである。[12] 分析には日本映画のフィルムも数々用いられ、サウンドなしに映画を見て、後に日本研究者や心理学者などによって討論が行われた。日本映画『チョコレートと兵隊』もその一つであった。[13]

戦時情報局時代、ベネディクトは日本に関する報告書や覚書きを書いている。"Japanese origins: Official Versions vs. Scientific" や "A note on Japanese suicide" また "What shall be done about the Emperor" もこの当時に書かれたものである。"Japanese Behavior Patterns" はそうしたものがまとめられた日本研究の総括といえるもので、"What shall be done about the Emperor" の大部分もこの中に含まれている。

II

"Japanese Behavior Patterns" をもとにした『菊と刀　日本文化の型』[14] は、アメリカで一九四六年一一月に出版された。

美を愛好し、俳優や芸術家を尊敬し、菊作りに秘術を尽す国民に関する本を書く時、同じ国民が刀を崇拝し武士に最

高の栄誉を帰する事実を述べた、もう一冊の本によってそれを補わなければならないというようなことは、普通はないことである。[15]

（『菊と刀』一章）

菊もまた同じように、鉢植にされ、毎年日本のいたるところで催される品評会に出品するために手入れをされるのであるが、その見事な花弁は一枚一枚、栽培者の手で整えられ、またしばしば、生きている花の中に、小さな、目につかない針金の輪（輪台という）をはめこんで、正しい位置に保たれる。[16]

（『菊と刀』十二章）

これらは、ルース・ベネディクトが『菊と刀』の一章と十二章で「菊」と「刀」を用いて日本人の性格をシンボリックに書いた箇所である。しかし、これはヴァッサー大学のベネディクト・コレクションにあるベネディクトの『菊と刀』の原稿には書かれていないことがわかった。[17]

ここに出版社とベネディクトの間で交わされた書簡のコピーがある。最初ベネディクトが考えていたタイトルは、“We and Japanese”[18]であった。原稿を書いていくうちに“Japanese Character”[19]に改めたいと考えるようになった。しかし一章を読んだ段階で出版社は、第一章に付けられた“Assignment: Japan”が適当なのではないかと進言した。[20]同意はしたもののベネディクトは、“Patterns of Culture: Japan”にしてほしいと書き送る。[21]これは、彼女の初期の代表作である“Patterns of Culture”を読者に想起させ、興味を抱かせるのではないかと考えたことによる。しかし、もし出版社がどうしても“Assignment : Japan”を推すならば固執はしないが、その場合は“Assignment : The Japanese”にしてくれることを希望する。[22]それは、ベネディクト自身が日本の土地を訪れたことがないという理由からであった。やがて、出版社は“Patterns of Japasese Culture”を提案する。[23]やっとタイトルがそれに決定するかと思えた時、急遽新しく三つのタイトルが編集会議によって浮上する。“The Curving Blade”と“The Porcelain Rod”そして“The Lotus and the Sword”の三つであった。なかでも出版社は“The Lotus and the Sword”を勧める。[24]ベネディクトは結局“The Lotus and the Sword”を選ぶが、「蓮」を「菊」に変えることを希望する。[25]

なぜベネディクトが、「菊」を望んだのかは詳かにされていない。しかし「菊」については“Japanese Behavior Patterns”の最終章「タイトロープを歩く」の中に見ることができる。[26]「正しい位置を保つため花弁の中に針金の輪がはめられている」菊は、日本人にとってどれほど「自重」することが重要なのか、「自重」を欠くことで世間から認められないばかりかひいては嘲笑されることになる日本人の様子を「輪がはめられた菊」にたとえて書いている。ベネディクトが日本人を「菊」に結びつけてイメージしていたことは明らかである。

ベネディクトは、タイトルが『菊と刀　日本文化の型』に決まったことから、「菊」と「刀」に関連する箇所を書き加えな

ければならなくなった。その結果誕生したのが一章と十二章に見る部分である。

ベネディクトが『菊と刀』で効果的に用いた日本人の行動様式についてのパラドキシカルな書き方は“Japanese Behavior Patterns”にも見られる。

たとえば、日本人は行動において驚くほど頑固であるが、同時に非常に順応性がある。日本人は従順であるが、上からのコントロールに対して容易には従わない。日本人は恐ろしく礼儀正しいが、同時に傲慢で横柄である。日本人は忠実であるが、同時に頼りにならず、執念深い。日本人は自制的で質素であるが、同時に楽しみや安らぎを好む。日本人は他人の意見をもとに行動するが、自分自身の中に強い良心をもっている。日本人は極度なまでに勇敢であるが、同時に臆病な国民である。日本の軍隊は熱狂的なまでに命令に従うが、同時に反抗的で自分で判断してふるまう。日本人は保守的であるが、同時に見知らぬ西洋の学問に熱中する。（“Japanese Behavior Patterns”[27]）

十二章でベネディクトが書き加えた箇所は、杉本鉞子の『武士の娘』からの引用を基にしている。十二章に限らず、四章、七章にも杉本鉞子の作品である『お鏡祖母さま』や『成金の娘』からの直接、間接の引用が見られる。杉本鉞子の代表作“A Daughter of the Samurai”は一九二三年一二月から一九二四年一二月まで雑誌『アジア』に連載された後、一九二六年に単行本としてDoubleday, Page & Co.から出版された。日本で『武士の娘』として翻訳出版されたのは一九四三年であった。[28]アメリカでベスト・セラー[29]にも選ばれた『武士の娘』は、因襲を背負って生きる姿が描かれ、アメリカ人に日本女性のイメージを強く印象づけたことから、ベネディクトが「菊」と「刀」を書き加える上で、うってつけの作品であったと言えよう。

日本人は彼らの生活様式のために高い代価を支払ってきた。彼らは、アメリカ人が、呼吸する空気と同じように全く当然なこととして頼りきっている単純な自由を、自ら拒否してきた。今や日本人は、敗戦以来、〝デモクラシー〟de-mok-ra-sie を頼りとしているのであるが、われわれは、全く純真に、かつ天真爛漫に、自分の欲するままにふるまうことが、どんなに日本人を有頂天にさせるものであるかということを想い起こさなければならない。この喜びを誰よりもよく言い表しているのは杉本夫人であって、杉本夫人は、彼女が英語を学ぶために入学した東京のミッション・スクールで、何でも好きなものを植えてよい庭園を貰った折の感銘を書き記している。

この何を植えてもよい庭園は私に、個人の権利という、今までに経験したことのない、全く新しい感情を味わわせてくれた。（中略）そもそも、そのような幸福が人間の心の中に存在しうるということ自体が、私にとっては驚異であった。（中略）今までに一度だって、しきたり

に背いたことのない、この世の中の何物にも害を加えたことのない私が、好き勝手にふるまう自由を与えられたのである。（傍線は筆者）

（『菊と刀』十二章[30]）

「日本人は…」から始まる文章は、タイトルが『菊と刀』になったために、ベネディクトが新たに書き加えた部分である。そして「この何を植えても…」は『武士の娘』から引用された箇所である。しかし、この引用は正確に言えばベネディクトの手が加えられている。『武士の娘』には次のように書かれている。

家の庭では、絶えず荒びないように心がけていたのですが、学校のは全くこれと違い、何もかも自由自在に、清新の気に充ち満ちていました。今までの生活と正反対のこの生活を、庭木に見るようにも思い、私はその幸福を心ゆくまで味わうと同時に、人の心の中にもこんな幸福があることを思って、生々した気持にみたされました。（傍線は筆者）

（『武士の娘』[31]）

『武士の娘』では「こんな幸福」とは「清新の気に充ち満ちた、今までの生活と正反対のこの生活」である。しかし、ベネディクトによれば、「そのような幸福が人間の心の中に存在しうる…」となっており、「そのような幸福」は、「個人の権利」となる。つまりベネディクトは『武士の娘』を忠実に引用したのではなく、作者である杉本が故郷にいた時の庭と今の学校の庭を比べて、その自由な気持を書いている数行前の文章、「こんな幸福…」を巧みに用いているのである。しかし前後を入れ替えたからと言って、『武士の娘』の意図を損ねるものではないだろう。

さらにベネディクトは、「菊」を登場させて、杉本に自由の素晴らしさを味わわせている。

この菊にはめこまれた針金の輪を取り除く機会を与えられた時の杉本夫人の興奮は、幸福な、また純粋無雑なものであった。

（『菊と刀』十二章[32]）

自由になるためには菊をささえる“rack”（輪台）を取り除かなければならない。“rack”や“drastic pruning”をしなくても菊は美しく咲くことができる。「西欧的な意味では（刀を捨てる）ことを日本人は申し出た[33]」。しかし、「日本人の考えでは、朽ち果てはしまいかと常に脅かされている心の内なる刀を守るという関心によって、日本人は不動の力を持つ[34]」ため、刀は「より自由な、より平和な世界になっても日本人は持ち続けることができる象徴[35]」なのである。『菊と刀』の広告宣伝文や一章に書かれている「菊」と「刀」、つまり菊は優美で日本人のやさしい審美的側面を表し、刀は殺伐で、日本人の好戦的側面を表すといった考えとは異なり、ベネディクトは盆栽に見られるような、そしてまさに杉本がそうであったような不自由な状態にある菊を嫌い、刀は自己責任を表すが故に、日本人は持ち続ける必要があると述べている。

菊は針金の輪を取り除き、あのように徹底した手入れをしなくとも結構美しく咲き誇ることができる。

この精神的自由の増大への過渡期に当たって、日本人は二、三の古い伝統的な徳を頼りとして、平衡を失わず、無事荒波を乗り切ることができるであろう。

（『菊と刀』十二章）[36]

III

こうしたベネディクトが菊と刀に対して抱いた考えを、"Japanese Behavior Patterns" と照らし合わせてみると、日本における統治政策に対するベネディクトの考えが一層明白になる。

天皇のもつ象徴的な力は、過去十年において侵略を進める上で効果を高めるための主たる策略であった。しかしながら、それはいかなる方向にでも用いることが可能な力なのである。それ自体、ドイツにおけるヒットラー体制がもっていたような征服や強制収容所といった意味は持たない。天皇のために日本国民が示す忠は、戦争で乱れた世界と同じく、平和な状態の世界とも矛盾することはないし、日本における社会の目的が変化するにつれ、それはやがてなくなり得るものである。今の天皇崇拝と、現在使われている軍事目的とを西洋人は区別することが望ましい。

（"Japanese Behavior Patterns"）[37]

ベネディクトは、文化は人間が作ったものであり、ひとたび文化の力が意識されると、社会の要求に合うように修正される可能性がある、望まれる世界への鍵のようなものと考えていた。またはっきりしていることは、「一見してその文化がどんなにアブノーマルに見えようとも、他の文化を損なうものでない限り、その文化の進むように任せるべきである」[38]と考える、ベネディクトの文化に対する基本姿勢であった。そしてベネディクトが得た帰結は次のものであった。

これらのデータによって一般的に裏付けられるひとつの帰結は、支配される人々の宗教への支配的な力による正面攻撃は、下位のグループの中に好ましくない結果を生じることである。これを日本に当てはめることは、重要な価値がある。皇室崇拝は、日本の厳しい宗教的教義で、他の教義を信奉する諸国をいかに怒らせようとも、それは日本人に深い忠誠心をもたらすのである。復興の中でなされるあらゆる仕事は、その背景で天皇がそれを認めているならば、容易に進むであろう。

（"What shall be done about the Emperor"）[39]

同様のことは "Japanese Behavior Patterns" でも書かれている。

宗教は、その色合いや方向において、国や共同体の社会生活を反映するのが常である。というのは、社会生活は変化し、宗教の祈りや儀式そして犠牲は、社会生活とともに変わるからである。これらの変化を法的に決めることは、協力を危険に晒すだけである。しかし変化は否応なく起こる。

（中略）要求される目的のために超自然の領域を用いる手段である宗教は、必然的にその社会における最も重要な目的を求める。その実際上の働きは、宗教歴史家が主張する以上に、時の経過に伴って変化しやすいのである。宗教は、変化した状態に伴ってその役割を必然的に変えるが、外部からの求めによって変えるならば、深刻な状況となる。

（"Japanese Behavior Patterns"[40]）

そして、宗教的側面から軍事目的を切り離すように考えることをベネディクトは提言した。まさにマッカーサーの政策はその通りに行われたのである。最も影響があった覚書きは、天皇の処遇に関するものであるとベネディクトは考えていた。宗教的側面において、神性の部分をなくすように提言したことに基づいてそれが行われようとしたがうまくいかなかった時、その経過はマッカーサーのスタッフによって、そしてまた、ベネディクトが戦時情報局にいた時、リサーチ及び分析局の第一地域の長であったヒルガードによっても、ベネディクトに知らされた[41]。その様子については『菊と刀』の中で、伝聞の形式で書かれている。

天皇に神性を否認するようにという勧告が行われた時に、天皇は、初めからもってもいないものを捨てろと言われても迷惑する、と言って異議を唱えたと伝えられている。

（『菊と刀』十三章[42]）

おわりに

邦訳された『菊と刀』が日本で発売された時、この翻訳書の広告宣伝文には、「この本によって天皇制の存続が決まった」とあったそうである、と青木保は書いている[43]。一九四八年一二月一二日の『朝日新聞』には、当時の「社会思想研究会出版部」による広告が掲載されている[44]。

対日政策の指針となった！　ルース・ベネディクト著『菊と刀』

冠には、「ＧＨＱ推奨　四大翻訳許可書」と書かれ、『菊と刀』以外にカール・ベッカー著『現代民主主義論』、Ａ・Ｊ・トインビーの『歴史の研究』そしてチャールズ・ビアード著『共和国』が掲載されている。

広告の内容から見て必ずしも否定できるものでもなさそうだが、これが先の青木保の言うものであると結論を出すことはできない。また、『菊と刀』がどの程度占領政策に影響を与えたのかは、今後の研究を待たねばならない。ベネディクトは『菊と刀』を書くにあたって出版社に、「なるべく専門用語を使わず、人間的に書きたい[45]」と語った。印刷直前に決まったタイトルは、ベネディクトを当惑させたに違いない。しかし、ベネディクトが望んでいた意味で『菊と刀』は成功したと言えるだろう。ベネディクトが人類学を始めた頃から常に願っていた「見知らぬ重要な国[46]」の研究が実現され、彼女は「自由[47]」に、その

見知らぬ国について書くことができたと言える。ベネディクトにとってこの仕事は決して苦労ではなく、心楽しい時であっただろう。『菊と刀』によって、アメリカ人は日本人を不可解で残酷でどうしようもない国民としてよりも、「人間」として見ることを可能にし、また、日本人の行動の源を知り、行動を予想することで、戦後日本の復興のためのアメリカのデザインを推進することを容易にしたのではないだろうか。ベネディクトが原稿段階で考えていた、そしてついに書かれることなく消えてしまった十二章の結び[48]に彼女の日本研究についてのエッセンスとメッセージがあるように思える。

西欧人が日本人の性格にみる矛盾は、日本人自身の基準に応じてではなく、我々の基準によって見るからこそ矛盾なのである。我々が日本人の条件をもとに日本人を見れば、或る日本人が私に、「でも、日本人はすごく単純なのですよ」と語ったことに、同意さえできるようになるかもしれない。

ニューヨーク州プーキプシーのヴァッサー大学図書館稀覯書の現館長ナンシー・マケクニー氏には、資料収集に際し御助力を頂きました。最後になりましたが、厚くお礼を申し上げます。

注

(1) Caffrey, Margaret, *Ruth Benedict : Stranger in this land*, Texas University Press, 1989.
福井七子・上田譽志美訳『さまよえる人　ルース・ベネディクト』(関西大学出版部、一九九二年)

(2) Benedict to Geoffrey Gorer, October 21, 1946, in the Ruth Fulton Benedict Papers, Vassar College Library, Poughkeepsie, New York. [The collection is cited hereafter as RFB Papers.]

(3) "Japanese Behavior Patterns," 59pp., RFB Papers.

(4) "From 'Japanese Behavior Patterns' to 'The Chrysanthemum and the Sword,'" in *Essays and Studies of Kansai University*, 1-4 : 44, 1995.

(5) "Ruth Benedict's Original Wartime Study of the Japanese," in *International Journal of Japanese Sociology*, No. 3 (1994) : 81-97.

(6) Gorer, Geoffrey, *Japanese Character Structure and Propaganda*, Committee on Intercultural Relations (mimeo.) 2 March, 1942.

(7) "Japanese Behavior Patterns," p. 1, RFB Papers.

(8) Office of War Information to Benedict, June 28, 1943, RFB Papers.

(9) Benedict to Dr. Bingham Dai, May 28, 1943, RFB Papers.

(10) Office of War Information to Benedict, January 1, 1945, RFB Papers.

(11) "An Appendix to The Chrysanthemum and the Sword : A Bibliography" : *Japan Review*, 6 (1995) : 107-125.

(12) C. Babcock, M. D. to Benedict, February 20, 1946, RFB Papers.

(13) Film List in RFB Papers.

(14) Benedict, Ruth, *The Chrysanthemum and the Sword — Patterns of Japanese Culture*, reprint ed. The edition originally published in 1946 by Houghton Mifflin Company, Boston. Reprinted in 1954 by Charles E. Tuttle Company by special arrangement with Houghton Mifflin Company.

長谷川松治訳『菊と刀　日本文化の型』(社会思想社、一九七二年)

(15) 前掲『菊と刀　日本文化の型』p. 6.

(16) 前掲『菊と刀　日本文化の型』pp. 342-343.

(17) The draft manuscript is in RFB Papers.

(18) Benedict to Ferris Greenslet, October 22, 1945, RFB Papers.

(19) Benedict to Ferris Greenslet, November 14, 1945, RFB Papers.

(20) Ferris Greenslet to Benedict, November 16, 1945, RFB Papers.

(21) Benedict to Ferris Greenslet, December 26, 1945, RFB Papers.

(22) Benedict to Ferris Greenslet, April 23, 1946, RFB Papers.

(23) Ferris Greenslet to Benedict, April 25, 1946, RFB Papers.

(24) Ferris Greenslet to Benedict, July 3, 1946, RFB Papers.

(25) Ferris Greenslet to Benedict, July 15, 1946, RFB Papers.

(26) "Japanese Behavior Patterns, p. 50, RFB Papers.

(27) "Japanese Behavior Patterns," p. 2, RFB Papers.

(28) 杉本鉞子「武士の娘の見たアメリカ」(婦人之友社、一九四〇年)

(29) *New York Times*, June 22, 1950.

(30) 前掲『菊と刀　日本文化の型』pp. 340-341.

(31) Sugimoto, Inagaki, Etsu, *A Daughter of a Samurai*, reprint ed. the originally published in 1925 by Doubleday, Doran & Company, New York. Reprinted in 1966 by Charles E. Tuttle Company.

大岩美和訳『武士の娘』p. 16 (筑摩書房、一九九四年)

(32) 前掲『菊と刀　日本文化の型』p. 343.

(33) 前掲『菊と刀　日本文化の型』p. 344.

(34) Benedict, Ruth, *The Chrysanthemum and the Sword — Patterns of Japanese Culture*, p. 296.

(35) 前掲『菊と刀　日本文化の型』p. 344.

(36) 前掲『菊と刀　日本文化の型』p. 343.

(37) "Japanese Behavior Patterns," p. 33, RFB Papers.

(38) "Japanese Behavior Patterns," RFB Papers.

(39) "What shall be done about the Emperor," 3pp., RFB Papers.

(40) "Japanese Behavior Patterns," p. 33, RFB Papers.

(41) Benedict to E. R. Hilgard, November 11, 1946, RFB Papers.

(42) 前掲『菊と刀　日本文化の型』p. 359.

(43) 青木保『日本文化の変容』p. 31（中央公論社、一九九〇年）

(44) *Asahi Newspaper*, December 12, 1948.

(45) Benedict to Wayman, July 24, 1947, RFB Papers.

(46) *An Anthropologist at Work : Writings of Ruth Benedict*, ed. Margaret Mead, reprint ed., p. 301. The edition originally published in 1966 by Houghton Mifflin Company, Boston. Reprinted in 1977 by Greenwood Press with the permission of Houghton Mifflin Company.

(47) *An Anthropologist at Work : Writings of Ruth Benedict*, pp. 425-426.

(48) The draft manuscript is in the RFB Papers.